様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３５６４

研究課題名（和文）アイヌ文化を取り入れた系統的カリキュラムと地域教材の開発～大量消費社会への挑戦～

研究課題名（英文）Development of systematic curriculum incorporating Ainu culture and local teaching materials-Challenge to mass consumption society-

研究代表者
諫山　邦子（Isayama, Kuniko）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０１６７７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：アイヌ民族の生活文化を小学校の教育に組み込むために、系統的なカリキュラム指針とそれに沿った教材を組み合わせた授業カリキュラム案づくりに取り組んだ。まず、先進的な取り組みとしての台湾・アラスカ・カナダの先住民族に関する教育事情の調査を行い、先住民族の自然との共存と持続的な社会の発展に寄与する哲学を洗い出した。次に自然に対する見方、世界観に注目しながら、それに基づいた、わが国での系統的なカリキュラムと個別教材を組み合わせた授業カリキュラムの試案を策定した。その後、部分的な授業実践として、小学校での試行授業を行い、教育カリキュラムへの適用について討議を重ねた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アイヌ文化の諸外国・先住民族の世界観との比較を含む系統的なカリキュラム化の教育研究は、萌芽的な取り組みとなる。成果を学校教育に取り入れることにより、現代の大量消費社会の持つ弊害に対して、別の価値基準(オルタナティブ)導入することのできる視点の教材開発としての意義がもたらされる。
学校・家庭・地域が連携した教育支援活動を通して、地域コミュニティーを活性化(文部科学省)することへの貢献。アイヌ文化振興法への貢献。学校教育・社会教育として、持続可能な社会へと志向する主体を育てることができる意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to incorporate the life culture of the Ainu people into elementary school education, we worked on a lesson curriculum plan that combines systematic curriculum guidelines and teaching materials in accordance with them. First, we conducted an investigation into the educational situation regarding indigenous peoples in Taiwan, Alaska, and Canada as an advanced initiative, and identified the philosophy that contributes to the coexistence of indigenous peoples with nature and the sustainable development of society. Next, while paying attention to the viewpoint of nature and the world view, we have developed a trial curriculum based on the viewpoint of the systematic curriculum in Japan and individual teaching materials. After that, as a part of the lesson practice, a trial class was held at an elementary school, and discussions were repeated on its application to the educational curriculum.

研究分野：野外教育

キーワード：アイヌの生活文化　先住民族　カリキュラム　授業実践

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1) 先住民族にかかわる自然観・世界観については、すでに多くの研究がなされている。共通して根底にあるのは、エコロジーの思想であり、自然全体については、生命サイクルとして理解されている。梅原や藤村は、日本人の原初的な自然観は、アイヌの伝承の中に見ることが出来ると述べている。筆者らは、小学生が活用できるような北海道アイヌに係わる体験的な地域教材をアーカイブ教材として発信を行ってきた。

(2) 台湾、アメリカ・アラスカ州、カナダ・ブリティッシュコロンビア州等、では、先住民族の知恵を分析し、体験的活動と結びつけながら学校全体のカリキュラムを編成している例もある。また現代の新しい生活様式に適応しながらも民族の持つ価値観・自然観を大切にする先住民族の生活文化の事例も見られる。こうした海外での先行事例・研究を範にとりながら、わが国のアイヌ生活文化の系統的カリキュラムを作成することが求められているところである。

２．研究の目的

(1) 本研究は、小学生を対象として、アイヌ民族を中心とするいわゆる狩猟採集民族の生活文化を教材とし、その共有する自然観・世界観との体験的出会いから、現代消費社会の価値観を見直し、持続可能な社会へと志向する主体を育てる系統的カリキュラムの開発を目指すものである。

(2) これまでわが国では、先住民族の知恵に学ぶ教材は、個別的には散見されたが、教育活動全体を貫く価値観として位置づけたカリキュラムとしては存在しなかった。本研究では、これらの地域教材開発を通じて、先住民族の持つ価値観を、現代社会を省みる上での基準として位置づけ、小学校を起点とし、中等教育へと続く系統的なカリキュラムの開発を目指すものである。

３．研究の方法

(1) アイヌ民族の生活文化の教材化と系統的カリキュラムの指針の作成：アイヌ民族の生活文化を衣・食・住に分類し教材化するために、次の四点を留意点として行う。①アイヌ民族の生活文化・生活様式を教材化する際、それぞれの教材の個別的な利用を考えるだけでなく、それぞれの文化・様式にかかわって、それを裏付ける自然に対する見方、世界観に注目しながらの分析・分類を行う。②白老町、白糠町、阿寒町、二風谷を中心に、現地の人々や現物にあたり、行われている行事や取り組みなどに触れ、当事者の行動と考え方の聞き取りを行う。③アイヌ民族の生活文化・生活様式の個別の教材化についての検討を行った上で、それに基づいた系統的なカリキュラム化の試みを行う。④先住民族の自然との共存と持続的な社会の発展に寄与する哲学を洗い出し、わが国における学校教育カリキュラムへの適用について検討する。

(2) アイヌ民族との比較調査を行う先住民族文化の調査：台湾、アラスカ、カナダの先住民族に関する教育事情の調査を行う。カリキュラム化については、 アメリカ・アラスカ州のエフィコ

クリン・スクールを先行事例として同校に対する訪問調査を行い、討議を進める。

(3) 個別教材を組み合わせた授業カリキュラムの試案と一部の試行：平成 30 年度には、カリキュラム指針に基づいて、個別教材を組み合わせた授業カリキュラムの試案の策定と試行授業を行い、附属小学校と連携をした検証を行う。令和元年度には、上記試行カリキュラムの改善・修正を行い系統的なカリキュラムを作成。完成させたカリキュラムについては報告書として、アイヌ文化の継承・発展と現代社会の消費生活に対するふり返りを行う資料として、関係各所へ頒布する予定で進める。

４．研究成果

(1) 白老町、白糠町、阿寒町、二風谷を中心に、現地の人々や現物にあたり、文献や行われている行事・取り組みなどに触れ、当事者の行動と考え方について、聞き取りを行った結果：自然と共生する生活は、自分たちを取り巻く森羅万象に魂が宿るという信仰を生み出し、なかでも、植物や動物など人間に自然の恵みを与えるもの、火や水、生活道具など人間が生きていくのに欠かせないもの、天候など人間の力が及ばないものをカムイ（神）として敬ってきた。アイヌ民族は、この世界は人間とカムイが関わり合い、影響を及ぼしあって成立していると考え、カムイと人間は互いに助け合う関係として、対等な立場で、時に、人間を庇護し、食料をもたらし、試練を与えたりすると考えている。このような考えで、生活に必要なものを入手し、生活の知恵としてのルールやマナーを成立させ、天災や病気への備えが行われてきたことが判る。カムイへの祈りの儀式は、重視され、まず、火のカムイに祈り、その後それぞれのカムイの恩恵に感謝し、もてなす儀式を通して行い、一方、病気や災いのカムイに対しては呪術的儀礼を通して払ってきた。

現代のアイヌ民族は、同化政策の中で、貧困や差別を余儀なくされて来たが、令和元年の「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」などを背景として、アイヌ民族の残された信仰や生活文化を基礎とし、現代生活の中で新たな生活文化を育みつつある状況である。

(2) 台湾（幼稚園・小学校・中学校訪問）訪問の聞き取りから：文化伝承で大切なポイントを①言語伝承、②文化伝承ととらえ、子どもたちが、自分以外の生活や文化を知ること、興味を持つことで、互いを理解することを目的としている。台湾政府の認めた原住民＝16 種族、42 種の言語に対応（12 月に族語の国家検定試験がある。16 種族の言葉すべてについてレベル４まであり、レベル３からは教師になる資格）。

幼稚園の教育では言語だけではなく原住民の生活習慣などを取り入れるようなカリキュラムを編成し、身近な自然との触れ合いが多い内容である。例えば、狩猟の道具である弓矢の模型を作って使用し、織物の柄を覚えて体験的に作成し、食習慣などを伝えて、どのようなものを身近な原住民は食べてきたかを学ぶなどの活動を行っている。

小学生に対しては織物や制作の体験活動、移動博物館活動を推進しており、展示品の移動だけ

ではなく、それに合わせて民族センターの指導者が説明・講師をする授業が含まれている。野外活動としてのキャンプは、台湾の文部省の推奨の活動である。原住民の歴史と文化を考えた時、自然との関係、自然と共存しながら暮らしてきた原住民族の生活を省みる活動などをしている。具体的には、自然観察活動、ロープワーク等をしながらの原住民族と同じ生活文化を体験するのではなく、現代の生活に活用できるようにアレンジされた内容としている。

中学生に対して、芸術に関わって特に力を入れ、歌、織物、体を動かす活動などを中心に教育プログラムを組んでいる。伝統の踊りだけでなく、他の民族との交流・国際交流にも力を入れた、世界に視点を置いた発展的融合的な学習内容を工夫展開している。

学校教育については、台湾政府が 2012 年から予算を組み、人材を養成し、幼児教育から原住民教育に系統的に力をいれている様子が伺えた。

(3) アラスカ州、フェアバンクス校とビーバー村の訪問から：「文化キャンプ」は、アラスカ先住民社会で広く実施されており、多くは現地の若者が（ときには学校教員やアラスカ大学の学生も）古老の指導のもとに村の「文化」を学ぶ宿泊を伴う活動である。アラスカ先住民の村落では、狩猟や漁撈が生活の基盤となっているため、参加者は狩猟・漁撈に関わる生業活動を試行錯誤しながら学ぶ。開催のねらいは、大きく分けて①学校教育との連携、②科学者の関与、③健康向上プログラムとしての位置づけがある。

学校教育との連携では、1970 年代に「タナナ・サバイバル学校」という取り組みがあり、高校生の年代にあたる先住民の若者 20 名が先住民の古老から、ヘラジカ革のなめし方、かんじきの作り方、ビーバーの罠猟といった伝統文化を 5 週間にわたって学んだ。1990 年代には、ミント村の古老とアラスカ大学の教育人類学者レイ・バーンハートが共同で企画する「オールド・ミント文化キャンプ」が始まった。 この取り組みでは、学校教育との関わりが強く、アラスカ大学の教育研究者は、これまで課題となっていた 「地域に根ざした教育」活動を進めるためにさまざまな活動をおこなってきた。

科学者の関与では、デナイナ人が住むセルドヴィア村の、村評議会の環境対策課が「文化キャンプ」の実施主体となった「アザラシキャンプ」と呼ばれるアザラシ猟について学ぶ取り組みにおいて、古老とともに、近隣で働く生物学者も指導者として携わってきている。

健康増進プログラムとしては、野外で狩猟や漁撈をしながら合宿することでアルコールや薬物の依存症患者の治療を図る実践がおこなわれてきた。野外活動をおこないながらカウンセリングを受け、同じ悩みを抱える参加者とともに健康的なライフスタイルを取り戻すことができるような内容である。

(4) 系統的カリキュラムの指針について：わが国の北海道内を中心としたアイヌ民族への聞き取りを背景とし、歴史、言葉、信仰、住居、生業、食、衣、踊り、遊びの 9 つの分類を提示し、台湾・アラスカ州・ブリティッシュコロンビア州での組織的取り組みを骨子とし、エフィコクリン・スクールのスパイラルカリキュラムの考え方を参考に、①家族、②地域、③アイヌの歴史、

④言語の知識、⑤自然環境、⑥野外での生活・健康、⑦栄養と食、⑧儀式や工芸、⑨雪と寒さ、⑩エネルギー、⑪春キャンプ・夏キャンプ、⑫北海道・日本・世界の 12 テーマを作成し、1 年生から 6 年生に向かって同じテーマの下での毎年の学習内容が進められるように配置をした。

教育の方法としては、トレイシーＥの UDL ガイドライン（３つの柱―①提示のための多様な方法を提供する＜「何を」教え、学ぶか＞、②行動と表出のための多様な方法を提供する＜「どう」教え、学ぶか＞、③取り組みのための多様な方法を提供する＜「なぜ」教え、学ぶか＞）とジョナソン D.W.の協同学習（５つの基本的構成要素―①互恵的な協力関係、②個人の責任性、③相互作用の促進、④社会的スキル、⑤グループの改善手続き）を視野に入れることによって、全員の子どもたちが学習に対して目的や意欲を持って取り組み、協同して問題解決に向い、創造性や身近な事象・現象に対して興味を持ち課題意識を持てることを意図した。

(5) 附属小学校での試行授業：2 カ年にわたって、4 回、計 6 時間にわたるゲストスピーカー（アイヌ民族、のべ 8 名の研究協力者を含む）による試行授業を、6 年生の児童 80 名を対象に行った。靴、土器、楽器、衣等の実物を中心とした教材を活用して、児童が文化と歴史について一定の洞察を持つことを教育目的とし、以下の 4 点が理解できることを到達目標とした。①文化は、優劣で決めるものではなく、それぞれの地域に根ざして生まれ、その民族の固有のものが多いこと。②文化は交易や交流によって、より、適したものに変わっていくものであり、それぞれの地域にはそれぞれの歴史があり、移り変わっていくこと。③アイヌ民族は擦文土器・擦文文化の影響、海洋民族のオホーツク文化の影響を受けていること。④それぞれの民族にはそれぞれの文化・歴史があって、違って当たり前であり、地球上には多様な民族・文化があること。

6 年生の総合的学習の「北海道の歴史から学ぶ」単元 20 時間のうち 10 時間を「アイヌ文化時代について詳しく調べよう」とし、上述の内容を 3 時間分、ゲストスピーカーの分担時間とした。児童は残りの 7 時間を情報収集、整理分析、課題設定（北海道に住む一人として、何を大切にしていくことが必要か話し合う）、まとめ・表現（調査してきた北海道の良さや魅力をもとに、自分なりの考えを述べる。お互いの考えを伝えあうことを通して、自己の生き方を見つめなおすことができるよう、発表会を行う）にあてた。

まず、ゲストスピーカーらの打ち合わせを 2 回行い、その後、6 学年の担当教員と授業主担当者らの内容と方法のすり合わせを 3 回行い、授業後の児童の学習継続の様子については聞き取りを行った上で、より望ましい授業への改良検討を行った。

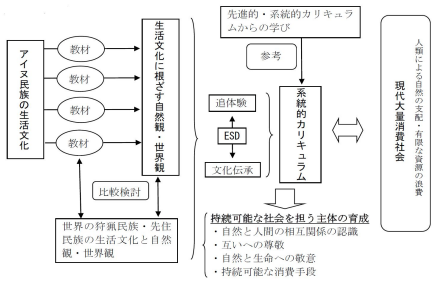

図１　カリキュラムのイメージ図

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大澤　純平、諫山　邦子	４．巻 22
２．論文標題 UDL(学びのユニバーサルデザイン）ガイドラインと共同学習を視野に入れた小学校理科における授業展開の一例	５．発行年 2020年
３．雑誌名 子どもと自然学会誌	６．最初と最後の頁 53-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤　祉秋	４．巻 91
２．論文標題 先住民野外教育の現在：アラスカと北海道での取り組みから	５．発行年 2020年
３．雑誌名 原教界	６．最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田丸　典彦、木村　浩子、諫山　邦子	４．巻 19（別冊１）
２．論文標題 アイヌ民族におけるギョウジャニンニクの伝統的利用法	５．発行年 2020年
３．雑誌名 園芸研究	６．最初と最後の頁 135-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤　祉秋	４．巻 28
２．論文標題 内陸アラスカ・クスコクィム川上流域におけるサケ漁撈史と現代的課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 北海道立北方民族博物館研究紀要	６．最初と最後の頁 7-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 田丸　典彦、木村　浩子、諫山　邦子
2．発表標題 アイヌ民族におけるギョウジャニンニクの伝統的利用法
3．学会等名 日本育種学会・日本作物学会・北海道談話会第60回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 近藤　祉秋
2．発表標題 内陸アラスカのサケ漁撈史と現代的課題：科学人類学と狩猟採集民研究のはざまで
3．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 KONDO Shiaki
2．発表標題 Northern Pacific collaborations for Educating New Generations of Indigenous Studies Scholars
3．学会等名 118th Annual Meeting of the American Anthropological Association（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 KONDO Shiaki
2．発表標題 On Athabascan Visions for Provisions: Culture Camp and Education for Food Security in Interior Alaska
3．学会等名 12th Conference on Hunting and Gathering Societies（国際学会）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

口頭発表
・諫山　邦子　アイヌの生活文化を活用したカリキュラムづくり　釧路野外教育研究会2018年次会議
・諫山　邦子　地域教材を取り入れたカリキュラム作り　アイヌ生活文化研究会2018会議

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	廣田　健 (HIROTA Takeshi) (30374755)	都留文科大学・教養学部・教授 (23501)	
研究協力者	田丸　典彦 (TAMARU Norihiko)		
研究協力者	近藤　祉秋 (KONDO Shiaki)		
研究協力者	椎久　慎介 (SHIIKU Shinsuke)		
研究協力者	千葉　誠治 (CHIBA Seiji)		